啄木遺児・京子の未発表写真

中尾 仁彦 さん　箱館歴史散歩の会主宰、第1回 函館検定 上級試験合格、ＮＨＫラジオ「どどんと道南ラジオ」に月１回レギュラー出演中。

今年は石川啄木没後１００年です。その最後に間に合うかのように、１２月２５日に啄木の長女・京子等の未発表写真５枚が、函館出身で千葉県柏市在住の常野正紀氏（以後寄贈者）から函館市中央図書館「啄木文庫」に寄贈されました。

従来、京子の幼い頃の写真は数枚存在していますが、このたび寄贈された中には結婚後と推定される写真や女学校の先輩と一緒の写真が含まれているなど貴重なものです。

写真：石川京子　（函館市中央図書館所蔵）

寄贈者の父・常野知一郎は、函館で新聞記者をしていました。同氏が昭和３４年に函館で発行されていた雑誌『海峡』に、石川京子夫妻との係わりを詳しく記していますのでその要旨を紹介しましょう。知一郎には、他社にライバル記者が二人いました、一人は後に直木賞作家となった久生十蘭（本名・阿部正雄）で、もう一人がジャーナリストとして優秀だった須見正雄です。その後知一郎と正雄は、戦前道内一といわれた北海タイムス函館支局で同僚記者となります。

一方、後に知一郎の妻となる松田テルが遺愛女学校３年生の時、京子が入学し姉妹のように親しくしていました。正雄と京子は、常野夫妻と個々につながっており、常野家で偶然に会う機会も多くあったようです。当時、函館では新聞記者仲間で演劇熱が盛んでした。ある上演に正雄が出演したとき、京子は楽屋へ「須見正雄様へ」と一筆を添えた箱入りチョコレートを届けたそうです。その帰路、京子は「正雄のことが好き」とテルに打ち明けています。

母・節子の死後、幼かった頃から京子は基坂の函館病院跡付近にあった啄木夫人・節子の父母である堀合家（京子の祖父母）に育てられていました。その向かいに正雄が勤務する北海タイムス支局があり、常野家でと同様に二人はよく見る機会がありました。そんな矢先、前述のチョコレート事件が「恋に悩む啄木の娘」と大正１４年２月にライバル社に大々的に報道されてしまいます。現在とは違い恋愛については世間の理解をえることが難しい時代、さらに京子は啄木の遺児として学校内で話題になる華やかな存在であっただけに、ミッション系の遺愛女学校は京子に対して厳しかったに違いありません。そのため情熱家の京子は「卒業証書は欲しくない、この恋のほうがずっと大切なのよ」と１４年６月に退学届けを出します。でも、二人が結婚するには越えなければならないもっと高いハードルが待ち受けていました。京子から石川家を継いで欲しいとの強い要望が出され、正雄は悩んだ末に婿養子の「石川正雄」となって、大正１５年４月に結婚します。

その後二人は函館に住み続けますが、昭和５年４月に上京します。啄木の資料の収集、単行本や全集の編集に携わりますが、残念ながら１２月、京子は急性肺炎で幼い二人の子供を残して、父・啄木より２歳若い２４歳で帰らぬ人となりました。

今回の寄贈写真は、テルのアルバムに張られていたもので、常々テルはアルバムを開いては京子の話を子供たちにしていたそうです。筆者は寄贈者の従兄弟ですが、今夏に５枚を見せられるまで存在を知らず驚いた次第です。さっそく函館市文学館に確認してもらったところ、未発表写真に違いないとの見解です。貴重な写真を常野家に秘蔵することなくぜひ公開してほしい、と筆者は要請しました。その際、二つの条件が出され、一つは写真が京子、正雄等であることの確認、二つは肖像権について石川家の同意を得られることです。

そこで１０月初旬に寄贈者に来函してもらい、函館啄木会・岡田弘子代表理事を通じて石川家に二つの要望を依頼しました。その結果、写真は間違いなく、また写真を発表することも差し支えないとの返答があり一安心しました。

明治１２年、２４００戸焼失の函館大火で多くの学校も焼失します。当時の区長・常野正義は復興の陣頭指揮をとり、明治１５年に函館区民の協力で開校したのが弥生尋常小学校です。区長・正義の孫が知一郎、ひ孫が寄贈者で、この学校に明治４０年６月に啄木は代用教員として勤務し、また京子は大正２年に入学しています。このように常野家と啄木家とは目に見えない縁で繋がっていたのです。

函館には啄木一族の墓が立待岬にあり、啄木の命日４月 13 日には一度も欠かすことなく地蔵堂で法要を実施しています。最後に、啄木に対する函館市民の愛着心が写真発表につながったことも添えたいと思います。

写真：石川京子（右）　常野テル（左）
（函館市中央図書館所蔵）